

教育心理学教室教官の研究状況報告

この1年（昭和53年から54年にかけて）

村 上 英 治

1) 昨年（昭和53年）は妙に松山に由縁が深かった。5月のゴールデン・ウィークに、愛媛大学養護学校教員養成課程の臨養課程で集中講義を行ったのを皮切りに、夏のはじめには、瀬戸内海、中島での学生相談担当教官による第4回エンカウンター・グループに参加、さらに10月には、特殊教育学会第16回大会のシンポジウム「重度重複障害児の発達と教育」が開かれるにあたって、司会の役割をになわされた。引きつづき今年度に入っても、昨年同様5月の同じ時期にふたたび、臨養課程の集中講義の依頼をうけたのも、この因縁のつながりであろうか。

2) 集中講義といえば、昨年から今年にかけてかなりのラッシュであった。上記の愛媛大学以外にも、昨年暮には東北大学に、また今年の2月には金沢大学に、さらに7月には岡山大学に出講した。それぞれの大学で、それぞれの雰囲気味わいながら、教官の方がた、学生諸君との交流を深め、いろいろと学ぶことが出来たのも忘れがたい思い出である。なおこの9月には、熊本大学での講義が予定されている。

3) 養護学校義務制は、ようやくこの年4月から、実施の運びに至った。学校教育法制定以来32年の空白を経てのことである。行政の怠慢もさることながら、私どもの努力の足りなさをも反省させられる。この年4月から愛知県教育センターでのプロジェクトとして、この義務制発足に伴っての就学指導の調査がかなり大規模にすすめられることになった。積極的にこのプロジェクトに参加することによって、私なりに、この問題への前向きな取り組みをすすめたいと考える。

4) 臨床棟における母子通園形態での発達障害児を対象とする集団療育活動（通称MRグループ）は、昨年も、研究生、学部生諸君の協力を得ておすすめることができたし、今年度また、それをうけて、第8期のグループに入った。いろいろ問題はまだまだ多いにしろ、障害児への福祉対策がすすめられてきた今日、たしかにこの療育活動の初期において対象となったような在宅障害児は、かなり重度に思われたものでも、どこかの施設でのルティーンの療育・保育・教育をうけることができるようになったのであろうか、私どもの対象児は次第にいよ

いよ重度化・多様化して、この子らととりくむ集団療育のあり方を改めて模索させられるこの頃である。また、母親が特にグループとしてのまとまりをもつことができるようになってきたのも昨今であり、母親の療育意識にも今後いっそう目を向けていきたいと考えている。

5) 私にとって、また私のもとで、障害児臨床を学ぼうとする学生にとっての Key-experience ともいうべき、毎年夏休みの終期における愛知県心身障害者コロニーにおける体験実習は、昨年は9回目を、今年は10回目を迎えることになった。これまでの歩みを、改めて「障害児者の生きざし」という視点でみつめなおし、もはや「生まれてきてすみません」の次元ではない、「がんばります、生まれてきたからには」と彼らに高らかに宣言せしめる時が来たとの意図は、昨年の紀要にも、〈第10報 — 人間としての生きざし — 〉として報告をしたが、その他、現代のエスプリ別冊「現代における自己実現」（1978）所載論文「障害者の自立と自己実現」、また、雑誌「教育と医学（27巻4号）」所載「障害児が生きるということ」、さらにまた、雑誌「愛護（26巻5号）」所載「施設の中での発達を考える」などの諸論文の中で、コロニー体験を中心にしての考察をすすめてきたのも、すべてこの線に連なるものである。

6) 昨年10月、九州大学における日本心理学会の大会では、「資格認定をめぐる」と題するシンポジウムが開催され、またその夜の「心理臨床の夕べ」においてもひきつづき、それら心理臨床家の当面する問題が提起され、日本臨床心理学会の今日における動きとは別に、心理臨床の現場で苦悩するものが、全国から一堂に集まって、その問題を語りあい、相互の研修を深めることの必要性が強調された。その流れにそって、今秋には、そうした「心理臨床家の集い」が症例検討を中心に名古屋で行なわれることとなり、現在その事務局をひきうけ、忙殺されている段階である。これと関連して、病院臨床に関与すること深い私としては、最近の保険診療点数の改訂の動きが心理臨床家に及ぼす影響を決して無視することは出来ない。その時点における私見の一端を、「人格検査の効用と限界—病院臨床にかかわるものとして—」と題して、

雑誌「教育と医学(26巻11号)」に寄せた所以である。

7) 病院臨床の実践では、相変わらず精神障害者の治療面接が主体となっている。ただ最近これら障害者をめぐる家族の問題はかなり厳しいものがあり、その意味からも、間接的にではなく、より直接的に家族そのものにつきあう頻度が重なってきた。こうしたアプローチをとおして、障害者の家族力動を今少し明らかにしていきたいと考える。今年度から臨床棟で始めたリサーチ・カンファレンスの機会に「家族とつきあうということ」と題するごく最近の症例を提起したのも、この線にそってである。

ロールシャッハ法に関しては、昭和54年度科学研究費を得ることが出来たこともあって、今年は視点を若干かえ、数名の研究仲間と共に、ロールシャッハ反応に示される「思考・言語カテゴリー」の再検討を試みはじめている。

8) 学生相談活動に関しては、昨秋、厚生補導特別企画の援助に基づき、名古屋大学では2年目の学生エンカ

ウンター・グループに参加してファシリテーター・ロールをとった。教官エンカウンターには、第2回以降、今夏の第5回河口湖におけるグループまで、4年つづけて参加してきたが、学生とのグループ体験ははじめてであり、私にとってはきわめてフレッシュな新しい出会いの契機を与えてくれたものとして印象深い。学生諸君同様、私自身にとっても自己を再発見することの出来たよい体験であった。

この1月、京都大学が当番となつての恒例の学生相談研究会議では、今回特に不本意入学の大学生をめぐって活発な討論会が行われた。私自身、最初のセッション「来談傾向よりみた新入生の問題」での司会の役割をになつたが、たまたま共通一次元年ともよばれる本年であるだけに、今回は、それに伴う大学適応状況についての検討をすすめることが要望され、その準備を私ども名古屋大学で引きうけることになった。これまたそれに忙殺されそうになっている昨今である。

(昭和54年8月17日)

研究経過報告 鹿内啓子

1. 帰属理論について

帰属作用における個人差、中でも self-esteem の影響について研究を進めてきた。昨年までは、自己の行動結果の帰属に対して self-esteem がどのような影響を及ぼすかを、中学生および大学生を被験者にして検討した。その結果、ある程度の一貫した結果が得られた。

この一年では、self-esteem が社会的な相互作用を通して形成されてきたことを考え、他者の行動結果の帰属に及ぼす self-esteem の影響について検討した。まず始めに中学生を被験者として実験を行なったが、この結果は日本心理学会第43回大会において発表する予定である。また、この研究では、成功・失敗の程度が一定に操作されていなかったなどの手続き上の様々な不備がみられたので、次に大学生を被験者として個人実験を行なった。この実験は終了したところであり、現在データの分析を行なっている最中である。

昨年経過報告に、self-esteem の高低による帰属作用の差異が達成動機にどうかかわるかを検討することを考えている。と述べたが、この点については残念ながら検討できなかった。今後は、self-esteem が帰属作用それ自体に及ぼす影響だけでなく、それが後続の行動、特

に達成行動にどう影響するかを検討していく予定である。

2. 対人関係の成立と発展について

大橋正夫教授他のメンバーからなる社会心理学研究会の共同研究で行なっているものである。

未知の者がどのように対人関係を発展させ、集団がどのように構造化されていくかを明らかにすることは、社会心理学の基本的問題の一つであるにもかかわらず、資料収集の困難さなどからあまり取り組まれてこなかった。昨年度の紀要に、女子大学生を対象にしてパーソナリティの認知とソシオメトリックな認知について継続的に資料を収集した結果をまとめて報告した。しかしここでは、第一回の調査が入学後すでに約一ヶ月過ぎた時になされていること、各回の調査での欠席者がかなりいたこと、大学生であるために、一応クラス分けはされているもののクラスが明確な一つの集団となっていないこと、などの不都合があった。そこで、形の明確な集団について、未知の者が顔を合わせた直後から継続的に調査をしたいと考えていたところ、幸い、本学部附属中学校のご協力を得ることができた。中学1年生の2クラスを対象に、一学期の始業式の日から、同性の級友に対するソシオメトリックな感情とその認知、およびパーソナリティ認知